

1.2 河川整備の現状と課題

1.2.1 治水の現状と課題

豊川では度重なる洪水被害を踏まえ、豊川放水路の建設や豊橋市街地での引堤による家屋移転等の地域の大きな犠牲を伴いながらも河川整備が進められてきた。現状では、霞堤を除く殆どの堤防が整備されているが、河道内整備が途上であり、洪水調節施設の整備も進捗していない。このため、霞堤地区では、浸水被害が度々発生しているだけでなく、堤防が整備済の区間についても、未だに十分な安全性が確保されていない。

このような現状で、戦後最大洪水流量を記録した昭和44年 8月洪水相当の洪水が発生すれば、洪水位は河口から約10kmの地点より上流の各所で計画高水位を上回り、甚大な被害が発生する恐れがある。このため、洪水位を低下させることにより、堤防整備済区間の安全性を向上させるとともに、霞堤地区の浸水被害を軽減させる必要がある。

さらに、洪水時の河川水位が高い状態において、下流部では近年の都市化の進展に伴い内水被害が発生していることから、本川等の水位の低減により自然排水を一層促進するなど、被害を軽減する必要がある。

また、資産が集中する市街地を抱える本川右岸10km付近の大村地区においては、堤防の高さはあるものの堤防の幅が狭い区間が残されているため、堤防補強が必要である。

なお、沿川の土地区画整理事業などに関連して河川改修を必要とする区間については、関係行政機関と調整を図りつつ、事業を実施する必要がある。

加えて、豊川下流部及び豊川放水路では、地震に伴う基礎地盤の液状化等により堤防の沈下、崩壊、ひび割れ等が生じた場合に浸水等の二次災害が発生する恐れのある区間が残っており、引き続き耐震対策が必要である。

また、整備水準を上回る洪水が発生した場合の被害を最小限に抑えるため、情報伝達体制の整備等のソフト対策も併せて進める必要がある。

一方、雨水の流出域となる上流域の森林面積の多くが人工林化しているが、今後林業従事者の減少と高齢化によって、森林の適正な管理がなされないことが予想されることから、水源涵養機能、保水機能の低下が懸念される。